様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８３０１１３

研究課題名（和文）フランスの中等教育段階における教育評価論の展開―教師主体の学習評価―

研究課題名（英文）History of theories of evaluation in secondary education in France

研究代表者
細尾　萌子（HOSOO, Moeko）

近畿大学・教職教育部・講師

研究者番号：７０６３３８０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：「目標に基づいた教育方法」（1970-80年代）と「コンピテンシーに基づく評価論」（1990・2000年代）というフランスの評価論が中等教育の制度や実践に与えた影響を明らかにした。その知見を活かし、日本の小学校で、パフォーマンス評価の実践研究を行った。パフォーマンス評価は、現実的な場面での問題解決力を育成・評価する方法である。実践研究では、教師の評価と子どもの相互評価によってこの力を育むサイクルを構築できた。

研究成果の概要（英文）：　I identified the influences of the following theories of evaluation that were practiced in France: "Teaching and assessment methods based on objectives [pedagogie par objectifs]," which was developed in the 1970s and 1980s, and "Competency-based-evaluation," which was practiced in the 1990s and 2000s in the secondary education system.

Action research was conducted to improve the efficiency of the "performance assessment" at an elementary school in Japan by using the outcomes of the above-mentioned theories practiced in France. Performance assessment is a method that aims to cultivate and evaluate students' abilities to solve problems in real-life situations. In this research, I developed an assessment cycle wherein students could improve their problem-solving ability by using the results assessed by teachers and peers.

This research confirmed that this new performance assessment cycle positively affected students' problem-solving abilities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育評価　フランス　中等教育　国際情報交換　PPO　コンピテンシー　ポートフォリオ　共通基礎

１．研究開始当初の背景

小学校・中学校・高校での子どもの学習状況を評価する日本の制度として、「指導要録」がある。2001 年改訂の指導要録では、各教科の評価を「目標に準拠した評価」として実施することが定められた。さらに 2010 年改訂の指導要録では、「思考・判断・表現」という評価の観点が新設された。また、学習評価は学習指導の改善につなげていくことが重要であると強調されている。これらの制度改革を受けて現在、思考力・判断力・表現力などの、知識の量にとどまらない「質の高い学力」を、目標に準拠した評価で見取り、指導の改善につなげることが求められている。

フランスの中等教育には、合格すると基本的にどの大学にも入学できる 1808 年創設のバカロレア試験や落第制度など、教育目標に基づいた学習評価の伝統がある。さらに、バカロレア試験には選択肢問題がなく、出題される問題のほとんどが論述式である。このように、知識の量ではなく、自ら考えたことを論理的に表現するという「質の高い学力」が、学習評価で一貫して重視されてきている。

したがって、フランスの中等教育段階における学習評価の制度が、どのような理論に基づいて設計され、学校でいかに実践されているかを知ることで、質の高い学力を評価して指導の改善に活かすサイクルを日本で構築する際の示唆が得られると考えた。

にもかかわらず、フランスの学習評価に関するわが国の研究では、バカロレア試験制度や日本の指導要録に当たる「学習記録簿」といった学習評価の制度の紹介はなされているものの、学習評価の理論、制度、実践のつながりは分析されていない。そもそも、各教育評価論の中身さえ明らかになっていない。

そこで本研究では、フランスの中等教育における学習評価の理論と制度、実践の三者関係を構造的に把握することをめざした。

２．研究の目的

1.の背景をふまえ、下記の二点を明らかにすることが本研究の目的である。

（1）教育評価論と学習評価の制度や実践との歴史的相互関係

フランスの教育評価論の展開は、「ドシモロジー」が興隆した 1930～1960 年代（時期①）、「目標に基づいた教育方法（PPO）」が発展した 1970・1980 年代（時期②）、「コンピテンシーに基づく評価論」が普及した 1990 年代以降（時期③）と区分できる。一つ目の目的は、各時期において、下記の 4 点（【1】～【4】）を明らかにすることである。時期①については【1】～【4】をこれまでの研究で解明したため、本研究では時期②と時期③を対象とした。

【1】教育評価論と学習評価の制度の関係
【2】教育評価論と学習評価の実践の関係
【3】学習評価の制度の学校における運用
【4】学習評価の理論と制度、実践が指導の改善にどのように結びついていた（いる）か。

（2）質の高い学力を見取って指導の改善に活かす実践性の高い評価サイクル

二つ目の目的は、(1) で得られたフランスの学習評価の知見を踏まえながら、日本の学校でのアクション・リサーチを進めることである。これにより、学校現場の実情に即して評価の枠組みを練り直し、質の高い学力を見取って指導の改善に活かす、実現可能性の高い教師主体の評価サイクルを創出することをめざした。

３．研究の方法

上記の研究目的を達するために、本研究では、下記の三つの研究方法を取った。

（1）フランスの一次資料による文献調査

2012 年 9 月 2 日～9 月 11 日、2013 年 1 月 2 日～1 月 7 日、2013 年 9 月 1 日～9 月 10 日の三回にわたり、フランスのパリ周辺でフランスの学習評価に関する仏文献を収集した。さらに、amazon.fr などのネット書店や日本の書店でも、フランスの学習評価に関する仏文献・和文献を収集した。

これらの文献を用いて、「目標に基づいた教育方法（PPO）」と「コンピテンシーに基づく評価論」の内実および、これらの理論と教育制度や教育実践との関係を探究した。

（2）フランスの高校におけるフィールド調査とフランス人研究者へのインタビュー

フランスの中等教師が学習評価の理論を実践にいかに活かしているかを明らかにするために、2012年9月4日～9月7日に、フランス東部のシャロン・シュル・ソーヌ市の高校で、フィールド調査を行った。ヒレー・ド・シャルドネ高校の歴史・地理のリサージュ教師と経済・経営のジョアンヌ教師に、二人が行っているポートフォリオ法という教育方法についてのインタビューや授業観察、ポートフォリオ検討会の観察を実施した。

また、コンピテンシーに基づく評価論の内実を知るために、2013年9月3日～5日に、フランス（パリとレンヌ）で、パリ西ナンテール大学のラヴァル教授とレンヌ大学のメルル教授、ピカルディー大学行政学・政治学研究センター研究員のクレマン氏にインタビューを行った。

（3）日本の学校でのアクション・リサーチ

日本の教師と、質の高い学力を把握し、指導改善に活かす方途を開発する共同研究を行った。校内研究の講師として招聘されている広島県庄原市口南小学校において、国語のパフォーマンス評価のアクション・リサーチを行った。パフォーマンス評価とは、知識を活用して生活の現実的な場面の問題を解決する力を育成・評価する方法である。

2013 年 1 月 30 日、2 月 13 日、5 月 22 日、6 月 26 日、11 月 13 日に、学習指導案検討や

授業参観、授業協議会に参加し、パフォーマンス課題やルーブリックに関する指導助言を行った。パフォーマンス課題とは、現実社会で起こりそうなリアルな文脈の問題を、知識や技能を総合して解決することを求める評価課題である。ルーブリックは、パフォーマンス課題で見られた子どものパフォーマンスの質を多面的・段階的に評価するための評価基準である。これは、パフォーマンスの成功の度合いを示すいくつかのレベルと、それぞれのレベルにあてはまるパフォーマンスの特徴から構成される。1 月 30 日と 2 月 13 日にはパフォーマンス評価の説明、11 月 13 日には作品の相互評価を通して子どもにルーブリックを作らせる研修も行った。

４．研究成果

本研究を通して、以下の二つの成果を上げることができた。一つは、フランスの中等教育における学習評価について、理論・制度・実践の三層から歴史的に検討し、それぞれがいかに結びついて指導の改善につながっているか（いないのか）を明らかにすることができた点である。

まず、目標に基づいた教育方法（PPO）は、教師が教育目標を設定し、生徒の目標の達成度を指導過程で継続的に評価し、評価で見取った各生徒の学習困難に応じて支援するというアプローチである。この教育方法は、学力向上と学業不振防止の社会的要求に応える方途として、1970 年代後半から 1980 年代の中等教育政策に大きな影響を及ぼした。学習指導要領において PPO が推奨され、実践マニュアルが学校に配布された。1980 年代には、PPO は中学校で広く認知されるようになった。従来のように教科内容を画一的に伝達するのではなく、生徒一人ひとりの学習状況に応じて指導することで、すべての生徒の学力が向上すると期待された。しかし、教師の目標の範囲に学習が縮まる、目標を行動で表すので学習活動が断片的になるなどの批判が寄せられた。PPO 批判は 1990 年代には一層強まり、PPO はコンピテンシーに基づく評価論に取って代わられるようになった。

次に、コンピテンシーに基づく評価論は、コンピテンシーの習得を、現実的な状況の課題を通して評価する理論である。コンピテンシーとは、特定の状況の課題を解決するために、知識や能力、態度を総合する力である。これは、普通教育に 1990 年代に普及した新しい学力概念である。このコンピテンシーに基づく評価論に基づいて、2005 年の教育基本法および 2006 年の政令において、義務教育段階で生徒全員が習得すべき基礎学力として、「共通基礎知識・コンピテンシー」（以下、共通基礎）が規定された。義務教育は 6 歳から始まる 10 年間である。共通基礎は七つのコンピテンシーで構成されている。さらに、2010 年度からは、共通基礎の習得状況を記録・認証する「コンピテンシー個人簿（LPC）」が、小学校と中学校で導入された。共通基礎は、多くの領域・項目に細分化されている（中学校では 26 の領域、97 の項目）。LPC は、生徒一人ひとりについて、共通基礎の各項目の習得を担任教員が日常的に評価し、習得状況を記載する評価簿である。このLPC の導入により、学校現場では、コンピテンシーの各項目の習得を評価しようとする余り、項目ごとの断片的な知識の伝達が行われて学習の体系性が失われるという弊害も一部で生じている。

そしてポートフォリオ法は、シャロン・シュル・ソーヌ市の複数の高校で自主的に行われている学習支援である。この方法は、共通基礎における自律性・自発性というコンピテンシーの成長を見取り、高めることを目的としている。ポートフォリオ法では、生徒と教師が個別の検討会を行う。そこでは、生徒が自身の学習の達成点や課題、課題の解決方法を考え、教師は助言を与える。このポートフォリオ法に取り組んだことで、生徒は学習意欲を向上させ、主体的に学習を進められるようになった。検討会で生徒一人ひとりと向き合うことを通して、リサージュ教師とジョアンヌ教師の授業が、教科の知識の一方的な伝達から、予想外の意見も含めて生徒の声を取り入れる授業へと変わったこともその一因であろう。ポートフォリオ法は制度化されていないものの、学校現場の裁量を活かしてコンピテンシーを育む一つの道を示している。

二つ目の成果は、以上の研究で得られたフランスの知見を活かしながら、口南小学校で実践研究を行う中で、質の高い学力の評価を指導の改善に結びつけるための示唆が得られたことである。

フランスの PPO では、教師が一方的に目標を定めると、目標に学習が縛られてしまい、目標として定められていないものの生徒にとって有用な知識・技能を学べなくなるという問題点が出てきた。またコンピテンシーに基づく評価論に関しては、目標として定めた学力を細かな要素に分けて各要素の習得を評価すると、学習の断片化が生じる危険性があることが明らかになった。

これらの点を意識することにより、口南小学校におけるパフォーマンス評価の実践では、個々の知識ではなく、知識の活用力そのものを評価することで、学習の断片化を防ぎ、知識の活用力を育成する手立てを考案することができた。さらに、評価課題と評価基準を子どもの作品や姿に基づいて作成したり、子どもに評価基準を作らせたりする手法を開発することで、教師の予想を超えた力も含めて質の高い学力を育み評価するサイクルを確立することができた。質の高い学力を総合的に見取る評価課題・評価基準を、教師と子どもがともに参加しながら作成することが、評価を実践の改善につなげて質の高い学力を伸ばすために重要であると明らかになった点が、本研究の教育実践上の成果である。

パフォーマンス評価は、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2010年3月24日）において、指導要録の「思考・判断・表現」の評価方法として紹介されている。今後、全国の学校で、パフォーマンス評価の実践が広がることが予想される。本研究は、パフォーマンス評価を進める上での理論的・実践的な注意点を示したという点で、インパクトを与える研究であると考えられる。

今後は、パフォーマンス評価のアクション・リサーチを続けるとともに、「コンピテンシーに基づく評価論」をめぐる論争を検討することを通じて、パフォーマンス評価に関する注意点を一層精緻化していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

1）細尾萌子「＜教育事情の日仏比較＞いじめ」『フランス教育学会紀要』（査読無し）第25号、2013年9月、pp.109-110。
2）細尾萌子「<書評>　G.ウィギンズ・J.マクタイ著、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』」『関西教育学会研究紀要』（査読無し）第13号、2013年6月、pp.49-54。
3）細尾萌子「フランスの高校における『ポートフォリオ法』の独自性―『誘導』の支援から『伴走』の支援へ」『近畿大学教育論叢』（査読無し）第24巻第2号、2013年3月、pp.77-102。http://kurepo.clib.kindai.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=AA12126544-20130331-0077
4）細尾萌子「フランスの中等教育におけるアメリカの教育目標・評価論の受容―中学校歴史・地理の『目標に基づいた教育方法（PPO）』の実践分析を通して―」『日仏教育学会年報』（査読有り）第18号、2012年、pp.50-61。（年報には2012年3月発行と記載されているが、実際に発行されたのは2012年11月。2012年9月30日付で、学会から校正依頼の文書が来ている。）
5）細尾萌子「＜教育事情の日仏比較＞通知表・指導要録」『フランス教育学会紀要』（査読無し）第24号、2012年9月、pp.169-170。
6）細尾萌子「＜図書紹介 6＞　①Philippe GUIMARD, *L'évaluation des compétences scolaires* (Presses Universitaires de Rennes, 2010)
②　Jean-Christophe TORRES, *L'évaluation dans les établissements scolaires Théories, objets et enjeux* (L'Harmattan, 2010)」『フランス教育学会紀要』（査読無し）第24号、2012年9月、pp.159-162。
7）細尾萌子・大津尚志・宮橋小百合・堀内達夫「フレネ教育実験コレージュ・リセにおけるカリキュラム開発の独自性」『フランス教育学会紀要』（査読有り）第24号、2012年9月、pp.79-92。
8）細尾萌子「フランスの新しい学力観―compétence は技能や能力とどのように異なるか―」『フランス教育学会紀要』（査読無し）第24号、2012年9月、pp.29-38。
9）細尾萌子「授業見学記　金先生の学級で、杉渕先生が授業をした」『教師のチカラ』（査読無し）No.10、2012年7月、pp.54-55。
10）細尾萌子「フランスの高校職業教育から大学への接続―会計コースに着目して―」『じっきょう商業教育資料』（査読無し）No.91、2012年5月、pp.22-24。file:///C:/Users/hosoo/Downloads/s91_07%20(1).pdf

〔学会発表〕（計3件）

1）細尾萌子「看護学生の実践能力を伸ばす評価とは―パフォーマンス評価とポートフォリオ評価―」講演、近畿大学附属看護専門学校、2013年12月25日。
2）細尾萌子「学生を伸ばす評価とは何か―パフォーマンス評価の進め方―」照林社主催看護教員実力アップセミナー　実習評価を中心とした臨床実践能力を伸ばす教育評価法、講演、都市センターホテル（東京、2013年8月18日）、福岡ソフトリサーチパーク（2013年8月25日）（両日とも同内容）
3）細尾萌子「フランスの中等教育における「ポートフォリオ法」の独自性―自律性・自発性のコンピテンシー向上をめざして―」日仏教育学会2012年度創立30周年記念研究大会、自由研究発表、早稲田大学、2012年11月24日。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
・テレビ出演
2014 年 5 月 26 日（月）7：00～7：50
NHK-BS1「キャッチ！世界の視点」
フランスのバカロレア試験についての解説を行った。

・アウトリーチ活動
「3.研究の方法（3)」で前述したパフォーマンス評価の理論と方法に関する講演を、看護学校教員の方に対して、近畿大学附属看護専門学校および都市センターホテル（東京)、福岡ソフトリサーチパークにおいて行った。

・ホームページ等
Researchmap、http://researchmap.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
細尾　萌子（HOSOO, Moeko）
近畿大学・教職教育部・講師
研究者番号：70633808

(2)研究分担者
なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：